

悪役令嬢に転生したら、
殺されるはずの義弟に溺愛執着
されて、
姉離れさせようと奮闘した結果、
本気セックスでイキ狂わされて
お仕置きされました。

ほのまる

その日、私は思い出した。

お父様とお母様に、養子を迎え入れると「彼」を紹介された日。

今まで見たどんな女の子より愛くるしく、金の髪に紫の瞳を持った、舌足らずで幼い彼を紹介された、その日。

この世界が前世でプレイしていた「転生聖女く純愛の掟」の世界であり、自分が悪役モブ令嬢レティシア・ローズ・シュバルツである、ということをも、思い出してしまったのだ。

ぶるぶると震えながらこちらを見上げる幼い少年に、ゆるりと加虐心が沸き起こったその時、前世の走馬灯が走ったのだ。

このままいけば、私、死ぬやつだ。

ゲームのシナリオが頭の中を駆けめぐり、だんだんと記憶が鮮明になっていく。

ウェインは、父上の弟、私からすると叔父にあたるその人が、不貞の末に見ず知らずの女に生ませた子どもであった。

しかし、レティシア以降子どもに恵まれず、特に後継ぎにする男児を切望していた公爵家当主にとって、血縁に「魔力持ち」の男児が生まれたことは願ってもないことだった。

魔力が発現した齡三歳に公爵家に引き取られることになった彼だが、以前の母にひどく虐待されていたらしい。

年相応の無邪気さはなく、顔色を伺いながらビクビクと体を震わせているさまは、生家での待遇の悪さを如実に表していた。

そう。そうなのだ。

艶やかな黒髪をたなびかせる、麗しの公爵令嬢レティシア。

ゲーム内での彼女は、この陰気な義弟が気に入らず、いびりにいびり抜いたのだ。

そのせいでウェインはさらに卑屈な人間に育ち、唯一優しさを見せた聖女に執着↓聖女が他攻略キャラと結ばれると闇堕ち↓王族の人間に手をかけ処刑↓公爵家滅亡、という最悪の結末を迎えてしまう。

（ウェインが本命の悪役キャラじゃん……っ）

聖女とウェインが結ばれる隠れルートもあるが、なんせ隠れルートである。シナリオ通りに進めば、公爵家滅亡まっしぐら。

二つほど歳が上とはいえ、自身も甘えたい盛りの年齢のレティシア。いきなり、よそからやってきた見知らぬ少年に、父親と母親の関心を奪われるのは、正直いって辛い。

しかし、こちらには前世の記憶があつた。

限界労働のすえ過労死して、「転生聖女く純愛の掟」の全シナリオを解放する前に未練の死を遂げているのだ。

せめて、現世はもつと楽しみたい。

震えながらうるうる瞳を潤ませる美少年に、若干の苛立ちはあるものの、ぐっと感情を抑え、微笑む。

OL時代の自我が芽生えた瞬間である。

「私はレティシア。あなた、……ウェインが、これから私の弟になるのね」

「……あ、れ、れてい、し……」

「そう、親しい人には、レティって呼ばれているわ」

「……………れ、てい……?」

おそろおそろ私を呼ぶ声に、こてんと首を傾け「なあに？」と返事をする。

その瞬間、彼の顔がぱあああつと綻び、白い肌が耳まで真っ赤に染まる。

……この弟、ちよろいかもしれない。

我ながらひどい姉だな、とも思うが、これも未来安泰のためである。弟に家族の愛情を与えつつ、自己肯定感を持たせ、立派な青年に育て上げる。そして聖女がウェインに惚れれば、我が公爵家はハッピーエンドなのである。



とはいえ、ウェインに根付いた恐怖心の克服は、そう簡単なものではなかった。

眠りにつくころ、コンコン、と扉を叩く音が聞こえ、またかと小さく息を吐く。

音の主は誰か分かりきっているので、部屋に入るよう促す。

小さな腕に抱えきれない大きなぬいぐるみをずりずりと床に引き摺り、えぐえぐと泣きながらウェインが入ってくる。

「うえ、え…、ねえ、さま」

最初こそ愛称で呼んでいたものの、日が過ぎるに従って、彼は私のこ

とを名前では呼ばなくなっていた。

仕方なくベッドの端に腰掛け、手を広げると、腕の中に小さな体が飛び込んでくる。

ふわり、ミルクのような甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「……お母様のお部屋でも良かったのに」

そう声をかけるも、胸の中でぶんぶん頭を振る。

どうしても、私がいいたい。

夜に一人が怖いらしく、乳母やお母様と寝屋を共にすることもあったが、それでは嫌だと駄々をこねる。

愛情深く育てるつもりではあるが、シスコンにするつもりはなかったのだが……。

涙で腫らした愛らしい目を向けられ、さすがに胸が痛む。

「……今日も、一緒に寝ましょうか」

途端に涙が引つ込み、笑顔になるウェイン。

（え？嘘泣き……？）

変わり身の速さに驚きつつ、布団をはぐって中に入るよう促す。

布団に入ると、ぎゅうつとか細い腕を私の体に巻き付け、胸に顔を埋めてくる。

「ねえさまのにおい、すき」

「……………匂い？」

「あんしん、する」

今日食べたお菓子の匂いでも染み付いているのだろうか…。

そんなくだらないことを考えながら、ウェインの愛らしい寢息の音を聞いていたら、いつも知らぬ間に眠りについてしまうのだった。



——昔の夢を見ていた気がする。

ウェインがまだ、女の子みたいに可愛かったころ。

ぷくぷくとした真つ白いほっぺに、私の名を呼ぶ小さな唇。一生懸命にこちらを見上げる、くりくりとした紫色の瞳。

あの頃は、あんなに愛らしかったのに……。

段々と浮上する意識の中で、あの時みたいに、体をぎゅつと抱きしめられる感覚がある。

いや、あの時の、というには、力が強すぎる。
ごつごつとした、大きな体に覆われているような……。

「ウエ…イン……んう？」

名前をつぶやくと、抱きしめられる力が、さらに強くなる。

「ああ、姉さま………っ」

ぎゅうううつつ。

男の硬い胸板が、顔に押し付けられている。

頭上では、鼻を擦り付けながら、くんくんと匂いもかがれている。

「……はあ、姉様の匂いだ。ああ、最高……♡」

息苦しきで私が胸を叩いて抵抗すると、拘束の力が弱められる。

恍惚とした表情でこちらを見下ろすウェインを、改めて睨みつける。

「ウェ…、ウェイン！！あなた、布団に潜り込むなど何度言ったら、

……っっ」

ちゅ♡、おでこに口づけをされる。

注意しようとした口をはくはくさせていると、ちゅ♡、ちゅ♡、顔中に唇を落とされる。

ちろちろ♡私の上唇を分厚い舌で舐めてきたので、とつさに手で口を覆い隠す。

それに負けじと手の甲に唇を押し付け、はむはむと表面の肌を啜えたあと、ゆつくりと舐めあげる。

繰り返しなぶられ、いやらしい気持ちになりそうなのが怖くて、手で顔を押しのける。

「……つつ！いいつ、加減にしなさい！！」

さらさらと流れる色素の薄い金色の髪。

その下から見える美しい薄紫の瞳が、子犬のような眼差しを向けてくる。

顔だけは昔の面影があるものの、こちらを抱く腕のたくましさは、あの頃からは大きくかけ離れている。

陶器のような白い肌に、瞳を縁取る長いまつげ、精巧に彫られた彫刻のような美しい顔。

我が弟ながら、惚れ惚れとしてしまう。

そうなのだ、義理とはいえ、我々は兄弟なのである。

兄弟にしては、このスキンシップは過剰すぎるのだ。

「もういい歳なんだから、こんなにベタベタするものじゃないわ…っ」
「…キスは愛情の証って教えてくれたのは、姉様だよね？」

それはそうなのだけれど………！

幼いウェインが涙を流すたびに、キスをして大好きだと囁いたけれども………！

「あの時は、お互い幼かったし………！」
「歳をとると、愛情は無くなるの？」

ああ言えばこう言う。

「くくくっつ。と、とにかく、唇にキスをするのは、恋仲にある男女だけなの！」

聞いているのかいないのか、ウェインが物欲しげな視線を唇に向ける。片方の腕で、ぐつと腰を引き寄せたかと思えば、もう片方の手で私の手首を拘束する。

しまった、と思った時には、美しい弟の顔が、目前に迫っていた。

「いまだに女慣れしない、可哀想な弟の練習に付き合ってよ、お姉さま」
♡

くちゅ、艶かしい音をたてて、唇が触れあう。

ちゅ♡くちゅ♡ちゅう♡

柔らかな感触が、触れては離れてを繰り返す。

その感覚が短くなり、ついには大きな口で激しく唇を吸われる。

ぢゅっ♡ぢゅふ♡ぢゅっ♡ぢゅっ♡♡

「んっ、んう…っ♡、やつ♡」

否定の言葉を吐こうとすると、その隙について、熱を持った男の舌が、ねろりと口内に押し込まれる。

舌の感触を楽しむかのように、ねろねろ♡舌を舐めたあと、溢れた唾液をじゅるるっ♡と下品な音をたてて、啜られる。

逃げようとした舌の裏を、硬い舌先でちろちろ♡刺激され、体がびくびく震える。

「も、やだ…っ♡」

息継ぎの合間に弱音を漏らす私を楽しげに見つめながら、ウェインが言う。

「…でも、練習しないと、ずっと女嫌いのままかもよ？」

ぢゅううつ♡♡わざとリップ音をたてて、唇を吸われる。

ねちよねちよ♡その柔らかさを堪能したあと、口の中の私の舌を探り出し、ねつとり♡舌を擦り合わせ、ぬちっ♡ぬちっ♡いやらしい水音を、部屋に響き渡らせる。

「ふ、ん、ん♡」

こんなの、ダメなのに……！

まさか、姉以外の女性が苦手な、激重シスコン弟に育ってしまうなんて……！

酸欠になりかけながら、なんとか状況を打破するための逃げ道を探す。

「わ、わかった、んうつ♡れ、れんしゅう、ん、ん♡するからあ♡」

くちゅ♡と名残惜しげに唇が離れ、疑わしげな視線がこちらに注がれる。

「ん……♡ほんとに？」

「ほ、ほんと…っ。だからいったん、この手を離しなさい…！」

「……うそついたら、もつとひどくするからね」

耳もとで囁かれ、戦慄する。

とりあえず、いったんベッドから脱出しないと話にならない。
この弟と戦うのは、それからの話しなのである。



ウェインは現在、王国騎士団に所属している。

貴重な魔力戦闘員として日夜業務に拘束されることが多く、最近王都の宿舎で寝泊まりすることが多い。

騎士団で戦闘員として活躍しているだけあって、あの甘いマスクに反するように、その体は鍛え抜かれた男の雄々しさを放っている。

一九〇センチほどの上背に、耳にかかるほどの煌めく金色の髪をたなびかせ、騎士団の制服を着て闊歩する姿に、一目惚れする女性も後をたないと呼んできていた。

本来なら女性たちが放っておくわけではないが、なにぶん、彼は大の女嫌いだった。どれだけ愛情を込めて育てても、その点だけは変えられなかった。

良いのか悪いのか、姉であるレティシアにだけは懐いているので、少しでも改善させようと奮闘した結果、こんなことになってしまったのだ。

騎士団からの要請が増え、顔を合わせる機会が減ってからだろうか。段々スキンシップが激しくなり、最近では、ついに性的な触れ合いを求めてくるようになった。

少しの触れ合いくらいならと甘くみていたが、それが迂闊だったのだ。



寝る時は、シルクの薄いネグリジエを身にまとうようにしている。

下着も着けていないので、ストンと落ちた生地が、乳房や乳首のラインをもろに拾ってしまう。

そのままではウエインと向き合うのは気まずいので、着替えさせて欲しいと頼むも、あつさりと却下された。

「普段の格好で、リラックスして練習したいじゃない？」

何が「じゃない？」だ。

そう思いはするものの、なぜか弟の言うことを無下にはできない。濃紺のスラックスを履き、同色のシャツのボタンを胸元まで外し、逞しい胸元を露出させた弟に、言いくるめられてしまう。

「リラックスして……、というか、私で本当に練習になるの？」

ベッドでウェインのとなりに腰掛けさせられ、頭上にある彼の顔を見上げる。

「だって…、姉様以外の女性とは、恥ずかしくてろくに会話もできないのに。身近にいる女性で頼れるのは、姉様しかないよ」

わざとらしく眉尻を下げて言うウエイン。

恥ずかしくて会話ができないというより、寄ってくる女性を冷たくあしらっているようにしか見えないのだが……。

膝の上に置いていた私の手のひらを、指先でつう……♡つとなぞられる。

「……っん」

「こうして、姉様と触れ合って、少しでも女性に慣れていかないと、ね♡」

さわさわ♡撫でたかと思うと、両手を握って、恋人つなぎをさせられる。

「手を握っただけで、心臓が爆発しそうだもん……。姉様と、もつと練習

しなきゃ♡」

真面目ぶった顔でふざけたことを言う。

その間も、手をにぎにぎ♡させて、指の股を刺激する。

握っていた手を緩めると、固い指ですりい♡すりい♡と私の指の股を往復させる。

性行為を思わすような動きに羞恥で顔に熱が集まり、慌てて俯く。

ちようど自身の胸元に視線がとまり、ピン♡と尖った乳首が、生地を押し上げて主張しているのに、気付いてしまう。

意識し始めると、余計そこに感度が集中してしまう。

ウェインの手の動きに合わせて体がかすかに揺れると、乳首がさりさり♡擦れて、さらにぷっくり♡膨れてしまう。

声にならない悲鳴をあげる私に、ウェインが耐えるように息を吐く。

「……ねえ、あんまり煽らないでよ」

耳にふう♡、と息を吹きかけられ、体がビクンと跳ねる。

「も、もう、いいつ。もう、充分……っ」

「何言ってるの。これだけでちんぽ勃起してるのに、ろくに女性と交流できるわけないじゃん」

手を取られ、ウェインの盛り上がった下部に手を添わされる。

スラックスの上からでも分かる、凶悪な大きさを形作るそれが、手の下でビクビク♡反応している。

「手を握ったくらいで、ちんぽビンビン♡になるなんて、恥ずかしくて誰にも近づけないよ」

(なんて言い方を……っ)

脈打つウェインのペニスを、形が分かるくらい、しっかりと握らされる。

「残念な俺のちんぽ、姉様がちゃんとトレーニングして♡」

ほら♡と耳に息がかかる距離で囁かれる。

トレーニングなんていったい……、途方に暮れる私の手に無骨な手を重ね、一緒になって動かされる。

動かすたびに、ごりごり♡した感触が手にぶつかる。

手の中でどんどん大きくなり、ぬちゅぬちゅ♡濡れた音がする。

扱くたびに、ウェインの荒い息が耳にかかり、それだけで感じてしまう。

「ん、んう、ふ……っ♡」

耳を離そうとすると、追ってきた唇が耳たぶをやわやわ食む。

「ふぁ、あっ♡」

はむはむ♡耳を甘噛みされ、はしたなく嬌声をあげながら、弟のおちんちんを一生懸命扱う。

声をあげた瞬間、ウェインの肉棒がぶるっ♡と震えた。

「はぁ♡感じてる声かわいすぎ♡」

耳をれろれろ♡舐めたかと思えば、今度は硬く尖らせた舌でぢゅぼぢ

ゆぼ♡♡耳穴を犯される。

「んひっ♡ふあ、やらあ♡うえい、んんうっ♡」

辞めてほしくて名前を呼ぶと、動きが激しさを増し、耳全体を口で覆われ、貪られる。

じゅるるるっっ♡♡じゅるっっっ♡♡

じゅぼおっっっ♡♡

「んやっ♡ひっ♡やらああっっ♡♡」

じゅるじゅる♡吸われたかと思えば、舌でじゅっぽじゅっぽ♡穴をいじめられる。

「は……っ♡姉様♡手、止めちゃだめだよ♡」

言われるがままに、ゆるゆると手の動きを再開させる。ウェインの手で、指先を陰茎の先端に移動させられる。

濡れた先端を、ぬるぬる♡指全体を使って撫でさせられ、くちや♡くちや♡音を響かせる。

「姉様の手で、龟头にしっかり♡我慢汁こすりつけてね♡」

聞き慣れない言葉に頭が混乱する。これでは一体、どちらがトレーニングされているのか分からない。

ねちやねちや♡濡れた先端を撫でると、膨らんだ男根がドクドク♡激しく脈打つを感じる。息を詰めたウェインが、私の頭にこっ、と額を

乗せて、ふふ♡と笑う。

「姉様、ちくびがビンッビン♡に勃ってるね♡」

服の下でふ…つつくり♡勃ち上がった乳首に、視線が注がれている。

「や、み、見ないで、え」

「ぶっくり膨らんだ乳首、俺の指でこりっこり♡捏ねて、濡れた舌でねつとり♡舐めてあげたら、もうっと気持ちよくなれるのにね♡」

想像して乳首がびくびく♡反応してしまう。それを悟られないよう身を捻るも、余計に擦れて、本当に気持ちよくなってしまう。

「っ♡、それ、は♡だ、だめ♡」

こんなことになっても、一線は超えてはいけないという、欠片の理性は残っていた。

「ふうん……。あ、手が滑っちゃった……。♡」

そう言って、ウェインの指が乳首をカリッ♡と弾いた。

「おっ♡」

カリッ♡カリッ♡カリカリッ♡♡

断続的に乳首を弾かれ、刺激されるたびに体が跳ねる。

「あゝ、この布の肌触り良くて、つい触りたくなっちゃう♡」

きゅ♡と乳首を摘まれ、「んおッ♡」と下品な声を出しながら、びくびく感じてしまう。

「はぁ♡もう視覚だけでイケそう」

興奮したウェインが、私の手を使ってペニスをさらに激しく扱かせる。

ごちゅ♡ごちゅ♡ごちゅっ♡ごちゅッ♡♡♡
カリッ♡カリッ♡カリッ♡カリリッ♡♡

濡れた性器と服が擦れ合う音が激しさを増し、乳首もずっとカリカリ♡もどかしい快感を与えられている。

もう手に力も入らなくなつたのに、握りしめるウェインの手が、力強く律動を促す。

ごちゅッ♡ごちゅッ♡♡ごちゅごちゅッッ♡♡♡

乳首を弄られながら、自分の手で弟の性器を勃起させ扱っている状況に、ひどい背徳感に襲われる。

もう、早く終わらせて欲しい。

潤んだ瞳で、訴えるように彼を見つめる。

「ウェイン……っ」

「ぐ………っ、ねえ、さまっ♡」

噛みつかれるようにキスをされ、少し開いた唇に、ウェインの舌がね

じ込まれる。

じゅっ♡じゅば♡じゅるるっ♡♡、はしたない音をさせながら、ぐちやぐちやに口内を舌で犯される。

れろれる♡ねちねち♡ぶじゅるるるっ♡♡

「ふ、んっ♡んん♡♡」

執拗に舌をねぶられるだけでなく、乳首の先端を弄っていた指で、ビンビン♡の乳首を思い切り潰される。

反射的に閉じていた目を開けると、こちらを凝視する熱い視線とぶつかる。

溶けきっただらしない顔を、ウェインにずっと見られていたのだろうか……。羞恥で瞳からぼろりと涙がこぼれ、くつと喉が鳴る。

刹那、ビンツツ♡と膨れあがった怒張が、手の中で爆ぜる。

ビュツ♡♡ビュクビュクツ♡♡ビュツ♡ビュルツツ♡♡♡

手の下で、大量の精子が吐き出されるのを感じる。どぶ♡どぶ♡次から次に精子が溢れてくる。

ぎゅ、と眉間に皺を寄せ、吐精の刺激に耐えるウエインから、壮絶な色気が醸し出されている。はぁ、と気怠げに息を吐く彼の様子に気恥ずかしさを覚え、ふい、と目を逸らす。

「これだけトレーニングしたから、少しはマシになったかも♡」

姉様ありがとう、と艶めいた声で感謝を言う弟を、複雑な表情で見つめ返すのだった。



何が姉様ありがとうだ、とウェインの様子を見て、心で毒付く。

忙しいウェインがわざわざ帰ってきたのには、理由がある。交友のある貴族令嬢から、夜会に誘われていたからだ。ウェインが単独で誘いに乗るわけではないので、姉である私がだしに使われた、という次第である。こちらとしても、彼が少しでも女性と親交を持つ機会を増やしたいので、チャンスではあるのだが……。

社交を好まないウェインが顔を見せると、参加している令嬢たちが、一気に浮き足立つのが分かる。

身にまとった漆黒の正装服には、金色の刺繍が随所に散りばめられ、筋肉質な体のラインに沿ったデザインが、彼のスタイルの良さを際立たせている。

普段は無造作にしている前髪も上に撫で付け、凛々しささえも増している。

問題なのは、その態度である。

多くの令嬢たちがウェインを取り囲むが、無表情に簡素な返事をするだけ。にこりともせずにあしらう様子に、こちらがハラハラする。

緊張しているというより、堂々と非礼を働いているようにしか見えない。夜会を主催したスワーズデン侯爵家の令嬢であるメアリー様と話しながら、つついっ弟を目で追ってしまう。

「相変わらず、ウェイン様の人気は凄まじいですのね」

「メアリー様、人気だなんて、そんな……」

「滅多に遭遇できない美貌の君ですもの、舞い上がる気持ちも分かりますわ」

私もそのひとりだもの、と扇子で口を隠したメアリー様が、微笑みながらこそりと言う。

こんなに美しい金髪美女に好かれておきながら、ポーカーフェイスを気取れる男の気が知れない……！

「ウェイン様のお姿を拝見できただけでも、貴重な機会ですわ。……ときにレティシア様、聖女様に関するお話なのですが」

待ってましたと言わんばかりの話題に、つい身を乗り出してしまふ。
そう、ついにこの時がやってきたのだ。

……いや、やってきてしまった、と言うべきか。

「なんでも、聖女様の召喚が成功し、次の王都での晩餐会で、そのお姿を披露されるとのこと」

召喚された聖女様はしばらく神殿にて保護されていたが、次の晩餐会で、王族、またはそれと近い者に、初めてその姿を見せることになっている。

国王陛下の血縁である父上も招待されていたが、体調を崩しているため、世継ぎであるウェインが招待され、付き添いとして私も参加することになっている。

そして、そこから始まるのだ。

めくるめく純愛ストーリーと、壮大な冒険譚が。

第一王子エリオス筆頭に、現れる美形攻略対象たち。

魔を祓いながら絆と愛情を深め、ちよつとエッチなアクシデントを乗り越えながら、結ばれていく聖女と攻略対象のひとり。

そのひとりに、ウェインが名を連ねてほしい、というのは私のわがままなのだろうか。

ウェインの気持ちを置き去りにしているような気もして、胸がチクリと痛む。ただそれが一番、死人が出ずに平和的にことが解決する方法ではあるのだが。

しかし、あのウェインが、聖女に会った瞬間一目惚れなどするのだから……。

奇跡的にウェインと聖女の気持ちを通じ合ったとして、あんな感じでちゃんと恋愛ができるのだろうか……。

考え出すと、悩みが尽きなくなってしまう。

話しもそぞろに、うぐん…と唸り出した私の隣りで、メアリー様が慌てふためいているのに気付く。

「メアリーさま……？」

ずいっと、目前に影ができ、聞き慣れた野太い声が降りてくる。

「スワーデン侯爵令嬢、お話中失礼致します」

声をかけられたメアリー様が、はくはくと口を震わせ、頷くしかできなくなっている。急に現れたウェインに声をかけられ、呼吸困難に陥っているようだった。

メアリー様に声をかけながらも、その瞳の先は私に向いている。彼から向けられた眼差しには、心なしか疲労の色が浮かんでいた。

「姉上、明日の公務もありますので、早いですが退出させていただきます
く……」

言いたいことはあるが、珍しく疲労感のある弟が可哀想にも思えた。重ねてメアリー様に非礼を詫び、ウェインと共に夜会を後にする。

心ここにあらずのメアリー様に、言葉が届いていたのかは、いまいち分からない。



帰りの馬車の中、当たり前のように隣に座ってきたウェインが、上半身だけ横たえて、私の膝に頭を乗せる。

「ああ、本気で疲れた……。まだ魔物の討伐する方がまし」

そんな不謹慎な発言を続けている。

「疲れたって言うけど、ろくに話しもできていなかったじゃない」

「話しならしてたって……。ご令嬢たちが俺を取り囲んで、あれこれ盛り

上がつて、楽しそうに話してたじゃん」

それはウェインではなく、令嬢たちが気を遣って話してくれていたのでは……。そう突っ込もうかとも思ったが、思いのほか疲れているウェインに、本気で怒る気にはなれなかった。

あれはあれで、本人は一生懸命にやっていたのだろうか……。ウェインの顔にかかった髪をそつと払い、頭を優しく撫でてからハツとする。幼い頃の癖で、ついつい頭を撫でてしまった。シスコンシスコンと言いつつ、弟離れできないのは私も一緒じゃないか。

「ああ、姉様が足りない……」

戻そうとした手を取られ、こちらを見上げたウェインがふぎけたことを言い出す。

「明日、朝早く馬を出すから、今日は泊まって姉様を補給していく……」

「

こんなに大きくなった弟が甘えてくるのを、なんだかんだ許してしまってきた自分が悪いのだ。自分の教育が間違ってしまったことを、心の底から痛感するのだった。



泊まっていくなのはいいが、私の部屋でいいとは言っていない。

湯浴みを終え、薄いネグリジェに着替えて部屋に戻ると、ウェインが

私のベットに腰掛けていた。

思わず、隠すように胸の前で手を組んでしまう。大きくなつてからは、寝静まった頃にひっそりと寢屋に入り込んで来ることはあったものの、堂々と部屋で待つのは珍しい。

「また忙しくなるし、しばらく帰つて来れないから……」

それが、人のベッドに忍び込む理由になるのだろうか。

「忙しくなるって、聖女様のことで……？」

「ご名答、と言いながらウェインが後ろに手をつき、長い足を組む。

「正式に会うのは晩餐会でだけど、国の大事だからね。騎士団は仕事に

追われてるんだ。エリオス殿下は人遣いが荒いから」

第一王子のエリオス様が騎士団の団長を務めており、補佐をさせられているウェインは、彼の小言を言うことが多い。

仮にもこの国の王位継承者に、軽口を言うなど憚られることである。

「エリオス様のことを、あまり悪く言うものではないわ」

軽く咎めるつもりが、ウェインの放つ空気が、一瞬で冷たくなるのを感じる。

「姉様が、ほかの男をかばうの？」

急に立ち上がり、剣呑な空気をまとった彼が、間近に迫ってくる。あ

れほど小さかった体が、今では見上げるほど大きくなり、二人きりの部屋にいと、妙に圧迫感を感じてしまう。

……男として意識してしまうようになったのは、いつからだろう。

雄々しい肉体が近づくほどに、女の大事な部分に熱が溜まり、じゅわり♡と蜜を垂らしてしまう。

そんな訳はないのに、音が聞こえてはいないか気が気ではない。見下ろすウェインが、私の髪を片方の耳にかけ、露出した耳たぶをすりすり♡さする。

「……っ♡」

多分、シナリオ通りに行けば、ウェインは聖女様に心を奪われるのだろう。

弟に触られ、こんなふうに感じてしまう私が、シナリオを狂わせるバグなのかもしれない。

指で耳の輪郭をそろりと撫でられ、耳の穴につぽつぽ♡指を差し込まれる。耳全体が性感帯にでもなったかのように、少しの刺激にも体がピク♡ピク♡反応してしまう。

「ふ♡、ん、ん♡」

ウェインが私に異常に執着するのは、ほかの女性が苦手で関われないから、姉である自分で性欲を発散しているにすぎない。

だから、本当に好きな女性ができたら、私で性欲を満たす必要はなくなるはず……。そこで、はたと気付く。

ウェインが聖女様に心を奪われた時、私に対するような執着を彼女に向けたら？

心ここにあらずの私を不審に思ったのか、ウェインの指が止まる。

聖女様に会おうまでに、ある程度の欲を私で発散させておく………？
ガツガツとしては相手に引かれてしまうし、こんなに滾った状態であれば、本命の女性に落ち着いて接することができないかもしれない。

今まで逃げてきたけれども、最後の務めとして、本格的に性教育をしなければいけないのかもしれない。

うん、うん、と頷き出した私を、ウェインが静観している。

条件はいろいろ、欲を解放させ、私を練習台にし、聖女様に紳士的な対応ができるよう、軌道修正しなければ………！

倫理的な問題はあるけれども、それはもう今さらだった。

決意を込めて、ウェインを見上げる。

「王都での晩餐会まで、もしあなたが望むのならだけど、好きなだけ私に甘えてもいいわ」

腕を組んだウェインが「……へえ」と小さく呟く。

「ただし、晩餐会でお会いする聖女様や、他のご令嬢にちゃんと対応するって、約束して欲しいの。あの、夜会の時みたいなのでは、なく……」

「ああ、愛想を振りまけてことね」

言い淀む私に、言葉を選ばずにはつきりと言う。何を考えているか分からない真顔だったウェインが、小さく口端をつり上げ、薄く笑った。

「聖女様と良い仲になるかもしれない弟に、姉様が性の手ほどきをしてくれるってこと？」

な、なぜ思考がバレているのだろうか……。

そういうことにしてあげる、とウェインが意味深に呟く。

「一応、一線は保ってあげてただけ……。もう、手加減しなくていいってことだね」

「う……。わ、私にできることなら、できるだけ頑張るから……。っ」

そしてそのあとは、今までのことを思い出さないよう、ウェインの前からは極力姿を消すから。

「だから……っ」

「じゃあ、姉様も、俺との約束ちゃんと守ってね」

「晩餐会の日まで、俺の気が済むまで、セックスの練習に付き合ってくれるってことだよね？」

「う、さ、最後までは、だめ、だけどっ」

色々手遅れな気はするが、そこくらいは守りたかった。

「最後までって、俺のちんぽを姉様のまんこにハメるのはってこと？」

「……………っ」

「じゃあ、どうされたら気持ちいいか分かるまで、姉様の敏感なところ、ぐっちゃぐちゃにいじっていいんだよね？」

「これから、えつちなこといっぱい俺に教えてくれるんだよね？ねえさま♡」



ソファに腰掛けたウェインの上に、向き合うように跨り、背に腕を回す。

ショーツしかまとうことを許されず、ブラを着けずに無防備になった乳房が、少し動くだけで、たふたふ♡揺れる。

恥ずかしくて膝立ちのまま耐えていたら、ぐいっと尻たぶを掴まれ、腰を降ろされる。

もにゅう♡と尻の肉に指が食い込み、ふ♡、と息が盛れる。

開いた足の間に、ゴリゴリ♡猛ったペニスを押し付けられる。

「…んっ、ん♡」

たったそれだけのことなのに、ぐりぐり押し付けられる熱の固さに、膣が反応してしまう。

ゆつくりと顔を近づけてきたウェインが、私の唇をうつとりと舐める。ねろおっ♡と上唇と下唇を舐めていた舌先が、開けと命令するように、唇の間をちろちろ♡叩く。

「んう♡ふっ♡♡」

尻肉をもにゅ♡もにゅ♡揉まれながら、口内に入り込んできた男の舌で、ねろねろ♡齒列をなぞられる。

ねちっこいキスと同時に、尻の肉を両方からむいつ♡と開かれ、お尻の穴を露出させられる。

わざと穴を露出させるように、むにいつ♡むにいつ♡と引つ張られては柔らかい肉を潰され、そのたびに膣の穴もくぱ♡くぱ♡開閉する。

お尻の肉を潰されながら、かったいおちんちんでごりごり♡されて、こすれ合ったショーツがねちねち♡濡れた音を立てている。

(あっ♡音恥ずかしっ♡お、おちんちんかたい……っ♡)

お尻を堪能していた手がそこから離れると、次は汗ばんだ乳房をもに♡つと下から優しく潰される。

もに♡もに♡大きな手で柔らかな肉を揉みながら、指の腹で勃起あがつた乳首をこりっ♡と擦られる。

「んいっ♡」

固く尖った乳首が、ぴんっ♡ぴんっ♡弾かれる。

「姉様、今までビンっビン♡に勃起してた乳首、ずっと触って欲しそうにしてたもんね♡」

「んああ♡んっ♡そなこと、な、いい？♡♡」

否定の言葉を口にしようしたら、ビインッ♡♡と強く引っ張られる。

ビインッ♡ビンッ♡♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡♡♡♡

「ひぎいっ♡んおっ♡おっ♡♡」

「うそついたら駄目だよ♡正直に言ってくれないと、練習にならない

じゃん♡♡」

引つ張つた乳首をぎゅうぎゅう♡容赦なく潰され、弾かれる。
ぎゅっ♡ぎゅっ♡♡ピンッ♡ピンッ♡ピンッ♡♡♡

「んあおっ♡お♡あ♡あっ♡♡」

「気持ちいい時は、ちゃんとそう言ってくれないと、俺分らないから」

掠れた吐息と共に、耳もとで囁かれる。

「気持ちいい？ねえ、ちくび気持ちいいよね♡、ねえさま♡」

問いかけながら、赤く腫れた先端をかりかり♡爪で引つ搔かれる。

「んあああ♡ば、ばい♡ちくび、きもち、ばい

っ♡♡」

「うんうん♡ちくび気持ちいいって言えてえらいね♡じゃあ、ピンピン♡されるのと、コリコリ♡されるのと、どっちが気持ちいい？♡」

「そ、な♡わかんない、お！？」

ピンッ♡ピンッ♡ピンピンッ♡♡指の腹で叩かれたあと、コリコリコリコリコリコリいっっ♡♡♡人差し指と親指で挟まれて、激しく捏ねられる。

「んあああっっっ♡♡♡」

「言ってくれないと分からないって言ったよね♡分からなかったら、練習にならないよね？」

強弱をつけながら、ぎゅ♡ぎゅ♡とつまんで、敏感になった先っぱを
かりかり♡♡つかれる。

「ん♡、ん♡、いあ♡、ピンピン♡、も、コリコリい♡も、お♡、ぎ
♡、ぎもち、いい♡♡」

正直どつちがどつちか分からないが、刺激から逃げたくて、適当なこ
とを言う。

「欲張りだねえ」と呟いたウェインが、半開きになった口到人差し指
と中指を差し込んでくる。

「んむ、っうう♡」

ぐちぐちと舌に指をなすりつけられた後、ずるうつ♡と引き抜かれた指に、ねっちより♡よだれが絡みつき、糸を引いている。

「……つつ、ふ♡」

そのまま、よだれにまみれた指を、ぬちやぬちや♡音を立てながら乳首になすりつけられる。

「んひつつ♡ふあ、やらあ♡」

よだれで濡れてテラテラと光る乳首を、根本からにゆるにゆる♡持ち上げられる。

にゆる♡にゆるう♡ねちやつ♡ねちやつ♡

入念にいじられて、ぷっくり♡勃起した乳首を作られる。

「ほ、お♡♡」

「ぬるぬるした乳首、指でいじめられるのきもちいい？♡」

「ん♡ん♡きもち、い♡ぬるぬる♡、きもちいい♡♡」

ぬるついた乳首がつぶされるたびに、ぷりっ♡ぷりっ♡指の中ではねて、たまらない気持ちになる。

乳首をいじるのに夢中になっていたウェインが、熱に浮かされたように「おいしそう♡」と呟く。

片方の乳房を下から持ち上げられ、ぐいつと上むかされる。屈んだウェインが、ピンッ♡と上向いた乳首を、乳輪ごと口に含む。

ぶぽっ♡ぶぽっ♡音をたてて乳輪ごと下品に吸ったあと、口に含まれた乳首をれろれろっ♡♡舐めまわす。

「んあ♡お♡んぐう♡♡」

もう片方の乳房もぐにぐに♡形が変わるほど揉みしだきながら、片方は口の中で乳首をめちやくちやに舐め転がされる。

れろれろれろつつ♡にちゅっ♡にちゅっ♡にちゅにちゅつつ♡♡

「んい♡んぐ♡お、おかしく、なる♡へ、へんになっちゃ♡」

ちゅぼっ♡♡唇を離れたウェインが、ぴろぴろ♡指で乳首を跳ねさせる。

「んお♡お♡ほおつつ♡♡」

「変になっちゃっていいよ♡変になるときは、イクって言って教えなきゃいけないんだよ♡ほら、イクイク♡して♡♡」

ぴろっ♡ぴろっ♡♡

ピンピンピンピンッッ♡♡♡

「乳首で雑魚イキ決めな♡」

そう囁いて耳朶を舌で舐めあげながら、にゆるにゆるになつて敏感になつた乳首を激しく捏ね回す。ピンッ♡ピンッ♡♡しつこくはじくのも忘れない。

「ほ、お、おぉおぉおおつつ♡♡♡」

頭がぼわあつとして、下腹部から上にきゅうううううう♡つと排泄欲に似た快感が突き抜ける。

「おっ♡おしっこお♡でちゃっっ♡あ♡ばっ♡イ……ッ、イツッ……
グッッッ♡♡」

びくっ♡びくっ♡ビクンッッッ♡♡♡♡♡プシャッ♡♡♡♡♡

はねた体が小刻みに震え、プシッ♡プシッ♡♡♡と透明な液体が股から飛び出る。

力が抜けた体でだらりとウェインにもたれながら、断続的に漏れる液体に、ビクビク♡体をひくつかせる。

「これはお潮って言って、気持ちよくなると出ちゃうんだよ♡おしっこ出ちゃうのも絶対可愛いけど♡お潮出るくらい感じちゃうの可愛すぎるね♡♡」

まだ余韻がおさまっていない体を今度は反転させられ、ウェインに背を向けて座る形になる。彼の大きな股の間に座らせされ、ぐいつと太ももを開かされる。

ウェインの胸に背中を預け、息を整える。息も絶え絶えで、抵抗を示すような力がもう残っていない。

開かされた太ももの内側を、大きな手で広げるように撫でられる。すり♡すりい♡撫でる手が、足の付け根のぎりぎりまで迫るものの、焦らすように肝心なところには触らない。

撫でるたびに、ぐいぐいと股を開かされ、秘部を突き出すような格好になっていくのが恥ずかしい。

「あ、あ♡や、だ♡」

「ん？何も嫌なことないよね♡もつと下品におまんこ突き出そうね

♡
」

突き出した秘部の中心を、ショーツの上からトントン♡指で叩かれる。

「んいっ♡♡」

中心から円を描くように、膣穴の周りをくるくる♡撫でられて、くちよ…っ♡くちよ…っ♡ショーツと愛液がこすれる音が響く。

「感じすぎて、お汁だつらだらじゃん♡姉様のまんこから、いやらしい音聞こえるの分かる？♡」

濡れすぎて透けて見える割れ目を、わざと音が聞こえるように、ねっちり♡撫でられる。ぬちぬち♡ねちや♡ねちや♡割れ目をいじっていた

指が、下着の中に潜り込んでくる。

ぐちっ♡ぐちっ♡グチュグチュッ♡ぬりゆぬりゆう♡♡

布の中で直接、割れ目のすじを繰り返しねつとり♡となぞられ、びくびく♡体を跳ねさせながら、ゆるりと腰が揺れる。

「そうそう♡自分からおまんこ突き出せてえらいね♡♡」

私の頭に、ちゅ♡ちゅ♡♡とキスをしながら、今度は下着を剥ぎ取られる。

粘ついた愛液まみれのそれを、手に丸めたウェインがくんくん♡鼻を鳴らして嗅ぎだす。

「な……っ！や、やだあ！」

「はああ♡濃っっいい姉様の匂い落ち着く♡♡たまんない♡♡」